

幹部) という。

道農政部は近く、糖度や直播比率を含む17年産ビートの道内生産実績を公表する予定だ。

16年実績を管内の市町村別にみると、芽室町などの直

播比率が10%台前半なのに対し、本別町は66%。人手不足でも収量を追求するか、作業の効率性重視か。管内でも対応が分かれている。

十勝のビート全道一 2017年産181万トン、糖度は17.2%に

2018年1月29日

十勝管内の2017年産ビートの生産実績がまとまり、生産量は181万4200トンと、台風被害で落ち込んだ16年比で39%増えた。振興局別でオホーツク(150万8500トン)を上回り、全道トップに返り咲いた。昨年は秋口の寒暖差が大きく、平均糖度も17.2%に上昇した。全道で見てもビートの出来は良く、製糖量は政府が生産者に支給する交付金の上限を超えるのがほぼ確実になった。

生産量回復

管内の市町村別では、帯広市の生産量が24万8000トンで最多。音更町、芽室町もそれぞれ20万トンを超えた。平均糖度は14市町村で17%以上となった。ビートの作付面積は管内全体で2万5556ヘクタールと、16年から500ヘクタール減少している。

ビートの生産者には経営所得安定対策として交付金が支払われ、糖度が高いほど重量当たりの金額が増える。半面、交付金が支払われるのは全道の製糖量で64万トン

まで。生産量と糖度から17年産の製糖量を概算すると66万トン台の後半だ。

直近では15年産も全道の製糖量が64万トンを超えた。道内のビート生産は十勝管内とオホーツクが全体の85%を占める。この2地域は機械化などで生産効率が高まっており、そろって豊作になれば今後も上限を突破する事態が予想される。

このため営農努力が報われない制度との批判は根強い。政府に対して、制度の見直しを求める声が強まる可能性がある。

「トラクターばん馬」終了 イモ病虫害を懸念 更別

2018年2月8日

【更別】「国際トラクターBAMBA」の実行委員会(仲川和博実行委員長)は7日夜、通常総会を開き、今年7月に予定していた第16回大会を中止することを決めた。昨年7月に村内で害虫のジャガイモシストセンチュウが発生したことを受け、農業機械の移動で害虫がまん延する可能性を懸念した。来年以降も断念し、実行委を母体に村の活性化につながる新たなイベントを模索する。

ジャガイモシストセンチュウは昨年7月のイベント直後に発生。ジャガイモの根に寄生する害虫で、人間が食べても悪影響はないが、イモの収量低下を招く。薬剤による防除ができず、その卵は固い殻に守られ、10年以上も土の中で生存できるとされる。

JAさらべつなどでつくる対策本部では、病虫害の拡大防止策として土壌の移動防止を掲げる。レースに出場するトラクターは村内外から運ばれており、レース前後に洗浄を行っているものの、「まん延する可能性をゼロにできない」(実行委)という。

実行委では、発生後から実行委員、過去の実行委員長経験者、村やJAと協議。この日の総会で昨年の15回大会について決算や事業内容を報告した後、今後のトラクターレースを中止する議案を提案した。

新イベント模索

実行委員会は今後も継続し、新規イベントの研究や協賛者に対するレースイベント中止の説明を担う。仲川実行委員長は「農家や商工業者、役場職員など垣根を越えた絆をなくさず、BAMBAを作った当時のように新しいイベントを一から作りたい」と述べた。新しい実行委員長に野矢譲司さん(40)＝農業＝を選出した。

トラクターBAMBAは村ふるさと館横の試験畑を舞台に、農業用の大型トラクターをばん馬に見立て、コンクリート製のそりを引くレース。2003年に始まった。村内では農家1戸のトラクター平均台数が4台を超えており、大規模農業地帯をPRするイベントとして定着。昨年は1万6700人(主催者発表)が来場した。